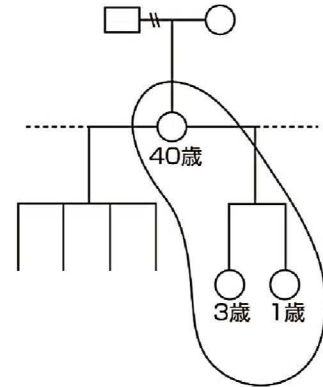


地域では生活管理が不可能と判断し 母子寮入所に至ったケース

重度の障害児の家庭訪問先から、「隣家は母親と女兒2人の家族であるが、母親が子どもの面倒を見ないし、子どもを置いて頻回に外出しているようで、夜遅く子どもが騒いでいる。姉の3歳ぐらいの子はまったくしゃべらない」との情報があった。

帰庁後、この家族は転入直後であり、3歳の幼児は3歳児健診が未受診であったことを確認し、幼児の発達と生活状況の把握のため家庭訪問をした。



住宅は1DKの5軒長屋の中央にあり、入り口を開くと、衣類、紙おむつ、紙類、ごみなどが布団の周りに散乱していた。台所には汚れた食器類、食べ残しや包装袋が散らかっているのが見えた。散乱している紙おむつのためか、異臭がした。

内縁の夫の関係で県外より転入してきたが、直後に内縁の夫は出て行き、知り合いはいない。親兄弟とも付き合いはなく、ケースワーカー、民生児童委員（長屋のオーナー）、隣人に親しくしてもらっていると話した。

母親は理解力が低いようで、やさしい言葉しか理解できなかった。第5子（3歳）は、身体的な異常はないが、明らかに肥満であり、言語がなく、無表情、おむつをしていた。1歳の女兒の発育は順調に見えた。次回の3歳児健診を受診することを約束して訪問を終えた。

3歳児健診後に、心理判定やことばの教室などの定期的訓練が開始された。家庭訪問し、居室の片付けを一緒にし、子どもとの接し方・遊びを一緒に行なった。保護費はパチンコにいき、食糧・菓子類・紙おむつを購入することで少なくなる。調理はほとんどしない（できない）で、生活保護費を支給されると外食、コンビニで弁当や惣菜を買い、半月で大半を使ってしまう。月末になると生活費が枯渇し、訓練に通うための交通費がなくなり、休みがちとなった。

「昨日母親が帰らなかった（外泊したらしい）ので、夜遅くに子どもが家に来た。お腹をすかしていたので、食べ物を探しに部屋にはいると、よく食べているおにぎりやパンの耳もなく、仕方なく我が家のご飯を子どもに食べさせた」との電話連絡が保健師に隣人よりあった。

すぐに訪問すると、子どもたちは隣家で落ち着いていた。しばらくして、母親が帰宅し、外泊の理由を尋ねた。母親はうつむいて何も言わなかったが、顔には化粧がしてあった。子どもに対して悪いとかすまないという気持ちはなかった。子どもは母親が帰宅したからといって喜んでいるふうではなかった。保健師は、この母親から子育て中の母親の印象ではなく恋をしている乙女の印象を持ち、子どもをおいての長時間の外出と外泊をしないことを約束して帰庁した。ケースワーカーと対策を考えた。

母親は、その後も子供にお菓子を置いて度々外泊し、風呂に入れない、おむつを変えない、満足な食事を与えないネグレクトと判断し、関係者との連携を頻繁に行なった。保健師・ケースワーカーが2週間に1回程度訪問し、民生児童委員が毎週訪問したが、改善しなかった。

「4日間位も母親が帰ってこなかった。食べ物がないので、子どもが家に来た。子どもにご飯を食べさせた。」との連絡が隣人よりあった。関係者が、母親を探したが居所はわからなかった。翌日、帰宅したとの連絡を受け、母親の話を聞きに訪問した。

母親は「彼と別れた・・・お金を渡した・・・悲しい・・・」など泣きながら話すが、子どもに対する気持ちは全く聞かれなかった。結婚歴がないこと、養護施設に前の彼氏、前々の彼氏との間の子どもが4人いる、と話した。今の2人の子どもの生活については「自分の力では子どもの面倒はみれない。自分の子だから・・・」と話した。

第5子、第6子ともに集団教育が必要であること、身勝手な母親に子育てが任せられるのか、生活管理・金銭管理能力が不十分である母親に対する支援をどうするかを関係機関で数回にわたって検討した。最終的に、2人の子どもを施設入所にするよりは隣町にある母子寮への入寮が適切ということで、母子寮を母親に提案することとなった。

母親は、母子寮入寮の提案を簡単に受け入れ、この家族は転出した。転出先の保健師へ連絡を取り、継続的な支援を依頼した。

感想：母親は中学校に通ったことがなく、知的レベルが低く、ネグレクトな環境で育ち、子どもに対して子育て放棄と言えるぐらいの事例であった。保健師は積極的に関わりを持ちながら信頼関係を築いて支援を行ったが、保健師が接近しすぎると母親は何もかも依存してしまい、新人保健師として距離感の難しさを痛感した。この事例への支援については、ケースワーカー、先輩保健師、事務系上司のほか他市町村保健師からアドバイスを受け、ケース検討会議ができた。経験の少ない保健師が悩みつつ助言を受け、最良の支援方法を選択できたのではないかと考える。

(長弘)